

心理コーディネーターになるために Vol.9

山下桂永子

☆破壊されたブラインド

週4日行われる適応指導教室のスタッフ打ち合わせ。朝は数分の短い打ち合わせなので、事務所に近くて他の相談室よりも広いプレイルームで立ったまま行うのが常である。その日もいつものように今日の活動予定など聞きながら、なにげなく窓の方に目を向けた。

ん？何かおかしい。窓際のブラインドがいつものように外からは見えないように閉じられているのだが、何かいつもと違う。閉じられているのに外が見えている。「ああ？」思わず声が出る。数人の視線が私に集まる。「あ、すみませんなんでもないです」と打ち合わせを続けてもらうよう促し、打ち合わせが終わったと同時に「あのブラインドなんかあちこち壊れてませんか？前からでした？」と誰にともなく声をかけた。

「あれ？ほんとですね、プレイセラピーでボールぶついたりしたのかな？」「トランポリンを立てかけたりしてるところも折れてますねえ」「換気するときこの隙間から手を入れて窓開けてましたけどそれもダメだったかなあ」など数人の相談員でわらわらとブラインドのそばに集まってあれやこれやと確認。

教育センターに引っ越してきて10年、プレイルームに設置されているブラインドはアルミ素材なので少し折れ目が出ている程度はこれまでもあったと思うが、それにしても先月ぐらいまでは、こんなにあちこちアルミ板が外の景色が見えるほど折れ曲がって下がっているなんてことはなかったはず。ブラインドの隙間から見えるのは、仕切りのフェンスと、隣の公園との間にうっそうと生えた木々。基本的には人もあまり通らないのでそこまで気にすることはないかもしれないが、なんだか薄暗い雰囲気なので、あまり気分が晴れる景色ではない。勝手に森の中の廃墟をイメージしてしまった。

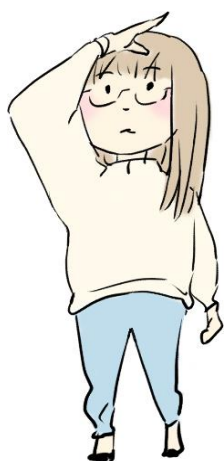
「うーん。とりあえずどういう理由でこうなったのか、わかる人がいたら山下に教えてください。修理するにしても買いなおすにしても同じことが起きたら意味ないし、このまま放置も子どもが手を突っ込んでケガとかしたら危ないんで」と数人の相談員にお伝えして部屋を出る。



☆されどブラインド

最近、私自身が保護者面談が多く、面談でプレイルームを使用することがなかったから気づくのが遅かった。あるいは普段使っている人ほど気づかないうちにひどくなっていったのもあるかもしれない。「これが割れ窓効果ってやつかあ。。。」とつぶやきながら自分の席に戻る。

「コロナで換気するから絶対必要って言ってお願いした検査室の網戸ですら、なんやかんやで半年以上かかったもんなあ。ブラインドなんて1年以上かかるんちゃうか。。。」修理にしたってお金がかかるようなものであれば勝手にやるわけにもいかないし、だからって放っておくわけにもいかない。このままでは、プレイルームを使う子どもと相談員の安全が心身ともに保たれない。これは心理士(師)が行う教育相談にとっては死活問題である。たかがブラインド、されどブラインドである。



☆大いなる壁

さて困った。もうそこからは面談や事務作業をしつつも、壊れたブラインドのことが頭の隅から離れない。数百円のおもちゃや教材程度の消耗品ならいざ知らず、おそらく数千円から数万円するような備品を買いなおすなんて、簡単なことではない。簡単じゃないどころか至難の業である。

心理指導員になって初めて知ったのだが、消耗品と備品の間には大いなる壁が立ちはだかる。消耗品ならば、それほどの手間(それでもいろいろ手間はあ)はかからず、事務員さんや上司のお手数をそこまでかけずとも(そこまでじゃなくてもお手数はかける)買ってもらうことはできる。しかし備品となるとそうはいかない。備品は値段の高さはともかく、予算にもともと組まれていないものは、買うのも設置するののもものすごく手間とお手数をおかけするのである。

さらに時間もかかる。上司にかけあって、予算を市にあげてもらって議会通してもらって、業者を選定してもらって、買ってもらって、設置してもらって、その間の全ての手続きに聞いたこともないような名前の書類を膨大に積み上げてもらわなければならない。

そしてその膨大な書類と事務作業をしていただくために、ブラインドを買い替えるに値する論拠を示さないといけないのである。心理職や対人援助職相手なら、「セラピーの心理的安全性の確保」とか言えば話は通じる(ことが多い)。しかしそれを心理職以外の人聞いてすぐに納得してもらえる確率は低い。心理の専門用語は一切使わずに言葉を尽くして説明し、納得してもらわなければならない。

最近でこそ、一緒に働いて数年以上の指導主事やいつも助けて下さ



る事務員さん(Vol.8 参照)であれば、納得していただけることは多いが、それでも書類を作っていただくためには、かなり丁寧に必要性を説明していく必要がある。

☆壊れた原因と修理

そんなことをあれこれ考えながら頭を抱えていた数日後、ブラインドが壊れた原因は判明した。やはりプレイセラピーでドッジボールをしていたときに、ボール(柔らかいタイプではある)が勢いよくあたってブラインドのアルミに折れ目がついたとのことだった。申し訳なさそうに謝る相談員の方に「謝る必要はないですよ、物が壊れることは仕方ないことです。これからは気が付いたらその時に言ってくださいね。」と極力明るく返したのだが、よっぽど責任を感じておられたのだろう。次の日にその相談員の方は、私や他の相談員が知らない間に、時間をかけて折れ曲がったブラインドのアルミの板を、一枚一枚指で押さえて平らにして、ほぼ折り目が目立たなくなるまで元通りに修復してくださったのである。

☆心理指導員として気づいたこと

後日、相談員の打ち合わせでブラインドが壊れた原因について報告し、今後何か対策がないか、アイデアを募ることにした。すると別の相談員が、「僕は、ボール使うときはそれとなく自分の立ち位置をブラインドのない壁側にして、自分が投げるときはブラインドにあたらないようにはしていましたね」とおっしゃった。

そうだ。プレイルームでボール遊びをするのはよくあることだし、なぜ今まで10年以上壊れていなかったのかと言えば、それぞれの相談員がそれなりに工夫はしていたからだ。その相談員の工夫の積み重ねで教育センターの教育相談は成り立っている。そしてその工夫の積み重ねを言語化して共有していくことも心理指導員の勤めになるのだろう。

プレイセラピーで、相談員が子どもの遊びや表現に寄り添うことと、心理指導員として、ブラインドが壊れないように相談員の動きに制約を加えることが何か相反するような気がしていたけれどそうじゃない。プレイルームの備品が壊れないように工夫することは、セラピーの心理的安全性を確保するためにも必要なことなのだなどと改めて気づかされた出来事になった。

